

玉川第一小学校の3年目となった。3年生、4年生と持ち上がったので、5年生はないなと思っていた。低学年は向かない。当時の校長先生から「高澤先生は、高学年いや中学校向きだな」と言われるくらいである。この時点では、まさか本当に中学校に行くことになるとは微塵も思っていなかった。

2年目の3月末に、次の年度の担任配置等がわかった。正直驚いた。「ないな」と思っていた5年生担任、しかも学年主任である。隣の学級には、新採用教員がくるというではないか。他の学年に比べて新5年生コンビだけが妙に若い。「大丈夫なのか」と見られる、思われるのが当たり前である。だが、愚かな私は、期待に応えなければならないという気持ちは強かったが、まわりからどう見られるのか、どう思われるかという意識は弱かったように思う。

自分も、あの当時の校長先生や教頭先生の年齢に近づいてきた。そして考えた。自分だったら、教員3年目の高澤先生を学年主任にして、新採用教員とコンビをくませるだろうか。なかなか勇気のいる校内人事である。

学年主任として、新採用教員の面倒を見ながら自分なりに1年間やってみた。その結果は、5段階評価でいうと「2」だったように思う。すなわち、不合格である。

学年2学級というのがよくなかった。5年生でクラス替えになる。すると、5年生の私の学級には、3年生、4年生と2年間担任した子どもたちが半分、初めて担任する子どもたちが半分となる。一方、隣の新採用教員の学級には、私が2年間担任した子どもたちが半分いる。これが学年3学級や4学級であればもう少し展開は違ったと思う。私の学級ではなくなった子どもたちは、私に見捨てられたと思ったはずである。隣の新採用教員は、最初からマイナススタートとなってしまった。明るく素敵な先生だったが、1年間ずっと苦勞をかけてしまった。

こんなこともあった。あの頃は、PTA学年行事というものがあつた。PTA学年委員の保護者の方と相談して、毎年、夏に様々な行事を行っていた。事の経緯は忘れてしまったが、兎に角、学年委員長長の保護者と私がけんかのようになってしまった。教頭先生に「すぐに学年委員長さんの家に行って頭を下げてこい」と言われ、しぶしぶ謝りに行ったことを覚えている。後で考えると、私ではなく、もう少しベテランの学年主任ならば、ああはならなかったと思う。学年委員長さんだつて、20代の若造に言われたら、おもしろくはないだろう。結局、すぐに頭を下げに行ったおかげで、その後の関係は良好であつた。

3年目の私は、2年目と比べると、しっくりこないまま終わってしまった。コンビを組んだ新採用教員の方には、今でも申し訳ないと思っている。学年主任が私でなかったらと思う。

文芸評論家である亀井勝一郎氏の言葉に「人間、何事か為さば悔恨、為さざればこれまた悔恨」というものがある。この言葉の如く人生に葛藤していた時期である。過去の出来事はいくら悔やんでも仕方がないことである。しかし、その体験から教訓を得て未来に向かう糧にすることができれば、辛い体験は大切な宝となる。

また、世阿弥に「初心忘るべからず」という言葉がある。あまりにも有名な言葉である。皆さんは、どのような意味で使っているだろうか。世阿弥のいう「初心」とは、物事を始めた時の初々しい気持ちという意味ではなく、己の技量の未熟さであり、失敗のことを指す。つまり世阿弥は、自分の未熟の自覚を忘れてそこに安住してしまえば、もはや芸は一步も上達しなくなると、慢心を強く戒めている。「初心忘るべからず」私にぴったりの言葉である。